
獣と無限の絆[∞]

鷹羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣と無限の絆[∞]

【Nコード】

N1407V

【作者名】

鷹羅

【あらすじ】

県立「西城高校」に転入することになった「櫻井桃花」。学校付近で2人の男子生徒に出会う。その名は「柊虎鉄」、「風谷龍臣」。西城高校最強の2人と飛鳥の絆はどう繋がるか…！？

出会いは始まりの合図

俺たちは

意味もなく喧嘩をしない

意味もなく血を流したりしない

って約束したんだ

もう2度と

同じ過ちを犯さない

って約束したんだ

『ここが西城高校…』

今日からここに転入するんだ…

「よし、行こう!」

……

「え?」

何やら迫ってくる

「どけえええええええつ！！！！！」

「えええええつ!!!?」

どんつ

٢٠٢٠

「どけっ
っ
っ
ただろ
！！」

「ひいつ!!」

「そう怒るなつて。ごめんな？大丈夫か？」

「あ、はい……」

「あーあー…足、擦っちまったな。」

「大丈夫です!!これくらい大丈夫です!!」

「俺、絆創膏持ってたんだ。足出してみる。」

「はい……」

綺麗な赤い髪：

「初めて言われたぜ。」

「へ!？」

「綺麗なんて言われたの、初めて。」

「心の中で思ってたことわかるんですか!？」

・・・

「「ぶはっ!!」(笑)」

赤い髪の人と銀色の髪の人が笑う

「え!？」

「ちゃんと自分の口で言ってたぞ？」

「えええっ!!!？」

「大人しくしてろって。」

「肩に力が入ってる。」

銀色の髪も綺麗…

「また自分で言ってるぞ?」

「ひゃわあっ!!!」

「おもしれえ奴だな…。ほら、終わったぞ。」

「ありがとうございます。あ、あの…！名前は…」

「どっち？」

「どっちもです…！」

「俺は虎鉄…！」

赤色の髪の人言う

「俺は龍臣…！」

銀色の髪の人言う

「お前は…？」

「私は桃花…！」

につこりと笑って走っていった

出会いは始まりの合図（後書き）

「獣と無限の絆[∞]」…

ある意味、三角関係にはならないような…なるような…

ま、先を読んだらわかりますね。

どうぞ。

第一歩 初めまして

『櫻井桃花です。よろしくお願いします。』

緊張気味に挨拶を言う

自分なりには、ちゃんと言えたと思う

「櫻井、席はあそこな。」

「はい。」

指指された方へ歩く

やっぱり注目されてるのか知らないけど、視線が・・・

「今日のLHRは、全員自己紹介をしてもらっからな。ネタになること考えとけ。」

HR終わる

『ねえねえ、櫻井さん』

前の席の人が話しかけてきた

「私、間宮茜。よろしくね！桃花ちゃん。」

「よろしく！桃花でいいよ。」

「ホント！？じゃあ、茜って呼んで？」

「うん！！」

早速友達ができました

— 安心です

その後、次々と友達ができました

「櫻井の隣の席の奴、気をつけたほうがいいよ。」

「危ない人でもいるの？」

「うん。このクラスでも一番危ないかも。」

「桃花、一番後ろの窓際でラッキーだけど…隣がねえ。」

「理沙、そう言えば、この前男子2人がやられたよ。」

「うわぁ…そいつら可愛いそう…」

「コラ！！転入初日にそんな話は駄目だぞ！！」

「始めたのアンタでしょ。」

笑いの花が咲く

「桃花って彼氏いる？」

「え！？いないよ！！」

「その全力で否定するところが怪しい。」

「いないって！！」

「こんな可愛い顔なのに。」

「そんなことないよ！！」

「っ！！」

「どうしたの？純子？」

「来たよ…噂のヤバイ奴。」

「げっ！！また後でね！！」

皆席に戻っていった

どんな人なのかな…？

きーんこーんかーんこーん♪

LHRが始まる

「まずは、担任の俺から。岡崎雄二。独身だ。」

「早く結婚しろー」

「熱血教師ー」

「うるせえよ。てめえら。」

先生がてめえって…

「次は出席番号順にいけー」

出席番号順に自己紹介していく

（おい）

何か聞こえた？

（おい、転校生）

私！？

（無視すんな）

隣の…うわっガラ悪い人…

（何？）

（お前、彼氏いるのか？）

（え？）

（俺は海斗。覚えときな。）

（急に何よ。）

（あ”あ？）

怖い…

「次ー、柴崎！！」

「柴崎海斗。趣味は寝ること。欲しい物は、転校生。」

…

「なあ、転校生。名前は？」

「私！？」

「お前以外誰がいるんだ？おもしれえ奴だな。」

「わ、私…」

やだ…助けて！！

虎鉄くん！！龍臣くん！！

『名前なんか言わなくていいぜ。』

『失せやがれ。柴崎。』

「虎鉄くん！！龍臣くん！！」

「何だあ？虎と龍の知り合いだったのか。」

「柴崎、てめえ女落とせねえなら相手すんな。」

「あ”あ？虎鉄…今日こそその面ボコボコにしてやる…！」

「おいおい、虎鉄だけ相手すんじゃないやねえよ。俺も相手しろ…！」

「え？え？」

「大丈夫！？」

「あ、茜え…」

「こらあっ…！柴崎…！柊…！風谷…！」

がつんがつんがつん

3人に拳骨が落ちる

「「いでええええっ…！！！」」

「お前なあ、仲が良いのか悪いのかハッキリしろ。」

「じゃあ、桃花の隣を変えろ…！」

「こんな変態を隣にしたら腐っちまう…！」

「はあぁっ…！？俺のどこが変態なんだよ…！」

「全部だ!!」

「わかったわかった。後で全員席替えするから、それで決める。」

「2人とも…」

「同じクラスだったんだな。桃花。」

「龍臣くん!!」

「気づかないなんて馬鹿みてえ。」

「虎鉄くん!!」

「おっと！俺は柊虎鉄だ。よろしく。」

「俺は風谷龍臣。よろしく。」「あ…まだ自己紹介もしてなかったのに勝手に名前で呼んでた…」

「構わねえよ。むしろそのまま呼んでくれて嬉しいぞ。」

「俺らも桃花って呼んでるし。」

「うん。」

「やばい…私、今顔赤いかも…」

「おい、その3人。お楽しみのところすまないが…」

「「「え?」「」」

「まだLHR中だ。それくらいわかれよな?」

「「「はい」「」」

また会っちゃった…

そして、時は過ぎた

『おい、桃花ー?』

「は、はい!?!」

ち、近いよ!!! 虎鉄くん!!! 龍臣くん!!!

「ぼけーっとして…大丈夫なのか?」

「大丈夫です!!!」

「昼休み、一緒にどうだ?」

「いいの?」

「ちよい待った!!! 桃花は私らというの。」

「俺と龍臣は、LHRの時の罰として学校案内しなきゃいけないの。」

「あー…そういえば言われてたね。」

「そうなの?」

「何だ…聞いてなかったのかよ。」

「ついでに昼飯食うぞ?」

「お金持つとくよ。」

「ああ。じゃ、行くうぜ。」

「柊ー、風谷ー、ちゃんと桃花守ってよねー!!」

「「あつたりめえだ!!」」

兄弟みたいだね(笑)

校舎内を歩く

「虎鉄、今日学食か?」

「ああ。龍臣は?」

「俺も。」

「あの…いいかな？」

「ん？」

「私のわがままだけど、外で食べない？」

「外？」

「パンとかオニギリとかあるって聞いたから。色々話したいことがあるの。」

「いいぜ。先に購買行こう。」

「ちょっと走るぞ。」

「うん！！」

・購買・

「おばちゃん！！メロンパンとチョココルネ！！」

「はいよ！！あら？今日は女の子と一緒にかい？」

「始めまして。櫻井桃花です。」

「礼儀正しい子だね。よろしくね。」

「焼きそばパンとクロワッサン。」

「龍臣くん、今日はカツサンドがお得だよ？」

「いただきます。」

「桃花ちゃんは？」

「えつと…」

購買のおばちゃんの前に並ぶパン

いっぱいあつて迷っちゃうよ…

「たまごサンドください。」

「はいよ。初めての子だからサービスだよ。」

パンを入れた袋の中にミニクロワッサンの詰め合わせを入れてくれた。

「ありがとうございます!!」

「あとジュース入れとくよ。」

紙パックジュースを3つ入れてくれた。

「ありがとよ!!」

お金を払って歩く

「いい人だね。」

「長年あそこに勤務してんだとよ。」

「あそこは大体のものはあるから、困ったら言ってみるといい。」

「わかった。」

…

「ねえ」

「ん？」

「どこ行くの？さっきから階段上がってばかりだけど…」

「屋上だ。あそこなら話しやすいだろ？」

「普段は鍵かかってて、出入り禁止なんだが。」

しゃきーんっ

「職員室から鍵を盗んで合鍵を作らせて貰った。」

「そんなことしちゃ駄目だよー!!」

「いーんだよ!!元の鍵はこっそり返したんだからよお。」

がちゃっ

「ほら、入れ。」

「う、うん…」

いいのかな…？

フワッ

「わあああゝ！！すごい！！」

「俺らのおっぴょおきの場所だ。」

「桃花だけだぞ。ここのことを教えたのは。」

絶景だよ！！

「さあて、飯食おうか。」

屋上の真ん中に座る

「カツサンド一口くれ。」

「メロンパン一口よこせ。」

仲良いなあ…この二人

「兄弟みたいだね。」

「よく言われるなあ。」

「生まれた日が一緒なんだ。」

「もしかして時間も？」

「ああ。ガキの頃は毎日泊まりに行ってたな。家が向かいだから。」

「何か奇跡だね…」

「桃花、タマゴサンド一口くれ。」

「あ、俺も。」

「いいよ。」

あれ？ちょっと待って…

これって…

間接キス！？

気づけば、二人は一口ずつ食べ終わっていた。

「お礼にチョココルネやるよ。」

「クロワッサンやるよ。」

「で、でも…」

「「間接キス？」」

「同時に言わないでよ!!」

絶対今顔赤いよお（ノ・ノ・ノ）

「気にすんなって。」

「お礼としてだよ。」

「いただきます。」

2人から貰ったパンは本当に美味しかった。

「飛鳥はどこから来たんだ？」

「北聖高校だよ。」

「「北聖？」」

「あそこって有名な学校だろ？」

「何で転校したんだ？」

「色々あったの…」

そう…色々…

「まあ、言わなくていいさ。」

「今日から西城だからな。」

笑ってくれるのは私のため？

優しいんだね。

「ありがとう。（^^）」

「「どういたしまして。」」

本当に双子みたい（笑）

食べ終わり、学校内を案内してくれた。

屋上のことは3人の秘密ということになった。

- 教室（2 - 1） -

「お帰り！！どうだった？」

「よかったよ。」

「あんたたち、手え出してないわよね？」

「出してないぞ。」

「んもう！！茜ったら心配性だね！！」

「そうだぜ。俺らはちゃんとか案内した。」

「（桃花、間接キスは内緒にしたほうが身のためかなあ。）」

虎鉄が桃花の耳の近くで囁く

「っ!!」

「何話してんのよ。」

「知りたいか？間宮。」

「だ、駄目!!言わないで!!」

「桃花のスカートは短いほうがいいっていつ話だ。」

「へ!？」

「それ俺も思った。あと、髪おろしてみろ。」

「命令形!？」

「ああ？」

こゝ、怖いよ...

「イメチェンタイム♪」

「えええっ!!!!?」

5分後

「似合うわよ!!」

「今日からそれで!!」

「可愛い!!」

女子の黄色い声

「ありがとう」

『柊くん、風谷くん!!』

「「あ?」

「きゃっ!!こわい。」

「「（めんどくせえ奴…）」

「あのねえ。明日のお休み、一緒に遊ばない?」

「「断る」

「冷たいよ。明日だけでもいいから。ね?」

「虎鉄、どうするんだ?」

「龍臣、答えは一つだ。」

「あたし、すっごくオシャレするよ?」

「いいぜ。」

「本当っ!?! やったあ!」

「明日の午後2時に噴水広場で待ち合わせな。」

「噴水広場ってわかるか?」

「わかるよ!! 大きい公園でしょ?」

「OK . また明日。」

「楽しみにしてるね!! バイバイ!!」

教室から出ていく

「桃花、どうした?」

「さっきの女が気になるか?」

「いや... 2人ともモテるんだなあつて。」

「そんなことねえよ。」

だつて...

さっきから他クラスの女子が2人を見てるもん...

「次は席替えだったな。」

「私、桃花の近くがいいなあ。」

「私だって桃花の近くがいい!!」

「私は皆と近かったらそれでいいよ。」

「桃花ったら優しい!!」

席替えの結果

私は、窓際から2番目の一番後ろだった。

私の前は茜。

横は…

「窓際が一番後ろ最高だな!!」

龍臣くんでした。

「だいたい同じ席だな。」

その前は虎鉄くん。

仲良しになった人たちがだいたい集まっています。

「桃花、よろしくな。」

「よろしくね。」

担任の先生がこれからのことを説明している。

あ、委員会決めるんだ

「じゃあ…柊！！前出て司会！！」

「自分でしやがれ！！」

あわわ…

虎鉄くんったら、先生相手にそんなこと言っちゃいけないよ

「俺は違う仕事があって忙しいんだ。」

「仕方ねえな…」

前に出る

「寝てる奴は起きろ。起きなかつたら殴る。」

寝てる奴ら起きる

「まずはクラス委員決めるぞ。クラス委員したい奴挙手しろ。」

シーン…（黙）

「男子女子1人ずつだ。」

シーン…（黙）

「お前ら、全部決まらなかったら放課後残れ。」

『えーーーー！！！？』

「雄二…黙れ…」

「柊の機嫌が悪くなる前に早くしろよ？」

そして、20分後…

「何でクラス委員だけ決まらないんだ？龍臣、お前やれよ。」

「は？俺は体育委員だ。」

「柴崎、お前やれ。」

「ふざけんな。殺すぞ。」

「まったく。口が悪い奴だな。」

「そりゃお前だろ。」

「消えろ。柴崎。」

「あ、あの…」

クラス全員が桃花の方を向く

「私、クラス委員やります!!」

「マジかつ(。°。°)」

「マジ…です。」

「決定!。拍手!」

パチパチパチパチ

「終、まだ決まってるないだろ。」

「仕方ねえ。俺がやる。」

「決定な。」

委員会を決めている間…

ん？

机の上に紙なんか置いてあつたつけ？

開けてみる

「明日、PM1時に学校前にこれるか？」

隣を見る

龍臣くんがニコニコ笑っている

「いいよ？」

と、書いて返す

あれ？明日って…

「オシヤレしてこいよ。楽しみにしとくから。」

「明日はさっきの子と遊ぶんじゃないの？」

「明日になればわかる。」

と、いうことがあった。

下校

「明日は…」

いいのかなあ…

「「桃花!」」

「びつくりした…」

「明日オシャレしてこいよ?」

「虎鉄くんも?」

「当たり前だろ。」

「あの子の約束はいいの?」
「大丈夫。任せろって。」

「アドレス教えて。」

「あ、いいよ。」

アドレスを交換した

「じゃあな。」

「また明日。」

「また明日（^^）／」

次の日…

・学校前・

「こんな格好でいいかな…」

「「よお」

「虎鉄くん、龍臣くん」

わぁ… かつこいい…

「「可愛いな。」

「えっ！？そんなことないよー!!」

「そんなことあるの。」

「行くか。」

着いた場所は

噴水広場

（桃花は初めて来た）

時刻は2時

「約束はいいの？」

「おう。ここじゃがんでろ。」

龍臣くんは頭を掴まれる

「来た来た♪」

目線の先には

昨日の…

「そろそろだな。」

「ああ、楽しくなるぜ。」

何のことかな…

『貴方？テツちゃんとタツちゃんと遊ぶ女。』

綺麗な女の人が近づく

『知らないとは言わせないわよ。』

『え…？あのお、私人違いだと思っんですけどお…』

『そう？柊虎鉄と風谷龍臣っていうんだけど。』

『私はその2人とデートするんですう。』

『止めてくれない？私のテツくんが汚れる。』

『ぶりっ娘はクズなのよ。帰って。私のタツくんを汚さないで。』

泣きながら逃げていった

「な？大丈夫だっただろ？」

「あの子可愛そうだよ。」

「優しすぎだ。」

『見てた？』

「見てたぜ。」

「その子が桃花ちゃん？」

「初めまして。櫻井桃花です。」

「「可愛い！！」」

「え！？」

「すっごく可愛い！！よろしくね！！」

「虎鉄さんと龍臣さんの彼女さんですね？」

…

「はぁ…」

「テツくん、ため息つかないでよ。私たち彼女だって。」

「桃花、よく聞け。」

虎鉄さんと龍臣さんに肩を掴まれる

「「おふくろだ。」」

「お母さん！？」

「初めまして…！！龍臣の母です…！！」

「虎鉄の母でゝす！！おもしろい子ねえ。」

「若いお母さんだね……」

「よくナンパされてる。」

「逃げた女は気にするな。あいつ、去年イジメやったらしいからな。」

「ねえ、テツくん。私たちも遊んでいい？」

「親父とデートじゃないのか？」

「烈ったら……遅れるみたいなの。」

「おーそうかいそうかい。」

「テツくん、冷たいわよ。たまには相手しなさい。」

「嫌。」

「タツもよ？」

「無理。」

「桃花ちゃん、家来る？」

「私ですか？」

「貴方以外誰がいるのよ。お化粧しない？」

「おふくろ、桃花で遊ぶな。」

「男は黙ってなさい。」

「桃花、行くぞ。」

「じゃあね。桃花ちゃん。」

「今度は遊びにいらっしやい。」

「ありがとうございます。」

「あれって…茜？」

「女1人は寂しいだろ？」

「誘っておいたんだ。」

「桃花可愛いね!!」

「茜可愛いね!!」

「女2人、どこ行くんだ？桃花はここら辺わかるか？」

「ここら辺は私でもわかるよ。」

「ゲーセン行かない？」

「いいぜ。」

「ゲームセンター」

「龍臣くん。」

「どした？」

「眉間にシワができてるよ？」

「ああ…悪い。挑発してくる奴がいるんだ。」

視線の先にはガラの悪い集団

「安心しろ。無駄に喧嘩はしない。」

「よかった…」

安心したかも…

「俺ってそんなに喧嘩しそうか？」

「うん…喧嘩腰だから…」

あー！！つい本音が…！！

「そうか…」

シュンツとへこむ

あ…!!悪いこと言っちゃった

「でもね!!龍臣くんは優しいってわかってるよっ」

ぽんぽんっ

「ふえ？」

軽く頭を叩いてきた

「俺も、お前がいい奴っていうことは知ってる。」

『桃花ちゃんっていつの?』

金髪の男が近づいてくる

「可愛いね。龍臣の彼女？」

「え?あの…私…」

「龍臣の彼女ならもつと欲しくなるなあ。」

「てめえら…」

「龍臣くん！！喧嘩しちゃ駄目！！」

昨夜、メールで虎鉄くんが言ってた。

龍臣くんは、すごく短気だ。すぐ喧嘩になる。

「ほおら、彼女が止めてるぜ？」

「この野郎っ！！」シャツをぎゅっと掴まれる

「駄目だよ…！！」

「飛鳥…」

「龍臣は彼女に弱いんだな。これで心置きなく…っ！！」

『龍臣が駄目なら俺がいる。』

「こ、虎鉄…」

「龍臣が駄目だって？いい加減覚えて欲しいぜ。」

「放せ！！」

「外にいる奴らは片付けた。」

「何だと!？」

「俺らに関わらないなら放してやるよ。」

メキメキと金髪の男の腕から嫌な音が聞こえる

「関わらないっ!!許してくれ!!」

「その代わり、女を紹介してやるっ。」

「いらん!!」

逃げる

「桃花、大丈夫か？」

「私は大丈夫。」

龍臣くん…

「間宮が席取ってくれてるから休憩するか。」

- カフェ -

「へえ…そんなことがあったんだあ…」

「うん…」

「おい間宮、ジャンボパフェ挑戦しようぜ。」

「ホント！？ 柊、付き合いいいね！！」

「俺たちもそうするか。」

「私そんなに食べられないよ。」

「俺も食うからさ。な？」

ジャンボパフェって初めて…

虎鉄と茜はドリンクバーに行った

「さつきはごめんね。」

「は？」

「勝手なことして…」

「いや…こっちこそ悪かった…。俺の悪いところなんだ。すぐ喧嘩になっちまう…。」

「虎鉄くんから聞いてたから必死になったよ…」

「虎鉄が言ったのか…。俺が喧嘩になってたら絶対あいつが止めるんだ。あいつ以外止められない。」

「親は？」

「あいつらは日常茶飯事だからって止めねえ。虎鉄は俺より強い。俺はあいつを止めたことはないな…。」

「そんなに強いのか？」

「ああ。俺が負けたんだ。」

「止めれる人はいないのか？」

「さあな…」

『ジャンボパフェお待たせしました。』

いざ、パフェへ!!(?)

「間宮、お前そっちばっか食うな!!」

「あ、ごめんごめん。」

「桃花、あれ気にするなよ?日常茶飯事だからな。」

「わかってるよ。」

「は?」

きよとんつとする

「龍臣くんから聞いた。」

「そっか（^^）」

ニコニコしながらパフェを食べる

「桃花！！そのアイス溶けてる！！」
「え！？あわわわっ！！」

「慌てんなよ。」

一口ずつ急いで口に運ぶ

「ほら。」

スプーンをこっちに向ける

「ありがとう。」

「おう…／／／」

食べ終わった

「結構多かったね。」

「美味かったからいいじゃねえか。」

「そうだね。」

「桃花、買い物付き合って!」

「いいよ!」

歩いて行く

「女って元気だよなあ。」

「俺ら荷物持ちかもなあ。」

「おい!! 早く早く!!」

「へいへい。」

夕方

「もう夕方だあ。」

「私帰らなきゃ。」

「桃花、おふくろが寄ってくれて。」

「わかった。茜、またね。」

「またねえ（^^）／
」

・柊家・

「龍臣くんの家って大きいね。」

「向かえのでかい家見たか？」

「うん。」

和風のお屋敷みたいな感じだなあ…

「そこ、龍臣の家だぞ。」

「ええっ！！！！？」

「そんなに驚くなよ…」

「2人の家って大きいね！！」

『桃花ちゃん！！』

「おふくろ、親父は？」

「もうちょっとで帰ってくるわよ。桃花ちゃん、ちょっとおいで。」

「あ、はい。」

虎鉄くんのお母さんの部屋かな…？

「龍臣くんのお母さん！！」

「はぁーい！！タツのママよ。」

「お化粧しよつか！！」

「でも…」

「硬くなっちゃ駄目よ？」

「私は華恋よ。」

「瑠佳よ。」

「名前で呼んで？その方が楽だね。」

「わかりました。」

「早速お化粧を…」

「お化粧はいいです！！」

「遠慮しないでよお。」

「タツったら、貴方のこと言ってたのよ。」

「テツもよ。女の子の話なんか何年ぶりかしら。」

「可愛い子でよかったわ。」

コンコンッ

『おふくろ、風呂だぞー。』

「はぁーい!!」

ガラッ

「おふくろ、何やってんだ？」

虎鉄くん、お風呂上がりだー。

「勝手に入ってこないの!!」

「春さんが呼んでたぞ。」

「あら、ホント？」

「桃花、風呂入れ。」

「そうね、タオルとか出してあげるから入りなさい。」

「家帰りますよ。」

「大丈夫よ。さ、一緒に入りましょう。」

お風呂に連れて行かれた

ピンポン♪

「客か？」

ガラッ

「どちらさーん？」

『ただいま。』

「あ、お帰り。烈、今日俺のダチ来てるから。」

「俺もダチが来てるんだ。ほら、入れ。」

『お邪魔します。』

「……？なーさん？」

「久しぶり。虎鉄。」

「どうしたんだ？何年ぶりだ？」

「娘が来てるだろ。」

「は？なーさん、娘がいたのか？」

「そうか！ー虎鉄も龍臣も会ったことなかったな。」

「桃花だよ。」

「へ？」

「櫻井桃花。俺の娘だ。」

「桃花？」

「華恋が電話してきたのはそのせいか。」

「これから桃花をよろしくね。」

「お、おう…」

なーさんの子だったのか…

・広間・

「お父さん！？お母さん！？何でいるの！？」

「いやあーまさか虎鉄と龍臣がいる学校だったとはなあ。」

「今日聞いてビックリしちゃったわ。」

「紗彩〜!!」

「久しぶり!!」

「華恋!! 瑠佳!!」

「桃花ちゃん可愛いわね!!」

「烈、刀哉さんいるか？」

「昼寝だろ。呼んできてやる。」

「お前、なーさんの子だったんだな。」

「お父さんの知り合いなの？」

「バッチリな。」

『よぉ〜お前ら。』

黒色と薄い茶色が混ざった髪の人が入ってきた

「あ、お帰り。雷地。」

「おう。そいつが桃花か？」

「そうだ。」

「ほお…。」

「ち、近いです!!」

顔と顔の距離

約2センチ

「紗彩にそっくりだな。」

「お母さんですか!？」

「ああ。おい、龍臣。瑠佳は？」

「飯作りに行った。」

「玄関で桃花に似た奴がいたんだから連れてきた。」

『お姉ちゃん…』

雷地の後ろから出てくる

「七歌!!」

「は？風勢の野郎、2人目かよ。盛りやがって。」

『紗彩のことを一番愛してるからな。』

「烈、お前知ってたのか？」

「いや？迎えに行つた時に知つた。」

「桃花、遙、烈おじさんと雷地おじさんだ。」

「「誰がおじさんだコラッ！！」」

「ああ…忘れてた。お前ら、席着け。」

「桃花と七歌はあつちな。」

座る

「お母さん、何するの？」

「自己紹介よ。」

「自己紹介？」

『待たせたな。』

広間に用意された席に座る

目の前にはたくさんのご馳走

「さて…まずは自己紹介といこうか。柊刀哉だ。烈の親父、虎鉄の祖父だ。」

「柊春奈です。刀哉の妻、烈の母、虎鉄の祖母です。」

「柊烈。刀哉と春奈の子、虎鉄の親父。」

「柊華恋。烈の妻、虎鉄の母です。」

「柊虎鉄。刀哉と春奈の孫、烈と華恋の子。」

「風谷巳早。雷地の親父、龍臣の祖父。」

「風谷若葉です。巳早の妻、雷地の母、龍臣の祖母です。」

「風谷雷地。巳早と若葉の子龍臣の親父。」

「風谷瑠佳です。雷地の妻、龍臣の母です。」

…

「雷地、タツ寝てるんだけど…」

「はあ？ったく…しょうがねえなあ…」

しばらくお待ちください

「風谷龍臣。巳早と若葉の孫、雷地と瑠佳の子。」

「以上だ。龍臣は寝るな。」

「へい。」

「風勢、紹介しろ。」

「ああ。櫻井風勢。桃花と七歌の親父だ。」

「櫻井紗彩です。風勢の妻、桃と七歌の母です。」

「えつと…」

「どう言えばいいのかな…」

「何で皆普通に言えるの!？」

「桃花、桃花の番よ。」

「櫻井桃花です。風勢と紗彩の子、七歌の姉です。ちよつと緊張した…」

「櫻井七歌です。風勢と紗彩の子、桃花の妹です。」

「櫻井、久しぶりに帰りました。」

「歓迎するぞ。風勢、紗彩、桃花、七歌。」

「何かあったら俺らを頼れ。桃花と七歌は虎鉄と龍臣を頼れ。」

「コップ持てー。櫻井の引っ越し祝いと再会に乾杯!!」

乾杯!!

^ | ^) / ▼ ▼ \ (^ | ^)

飲み会スタート

「華恋、酌してくれ。」

「はい!! 虎鉄もいらっしやいな。」

「ああ。」

「若葉さん、雷地がもうお酒に手を出しちゃいました。」

「あらまあ。ごめんなさいね。」

「いえ、いつものことですから。」

「瑠佳あ!! 今夜は寝かさねえぞあ!!」

「飲み過ぎよ!」

「桃花と七歌は紗彩に似てるなあ。」

「虎鉄くんの…」

「刀哉でいい。可愛い子だな。」

「いつでも遊びにいらっしやいね。」

「はい。」

「桃花。」

「龍臣くん、さっきの痛そうだったけど…」

「バックドロップをともに喰らっちゃった…。」

「あれを見て目え覚めたぜ。」

「、乾杯しようぜ。」

「さっきしたのに?」

「いーのいーの。七歌もしような。」

「うん!」

いつの間に仲良くなったのかな…?

「コップ持って。」

「うん。」

「俺たちの出会いに乾杯!!」

「『『『かんぱーい!!』』』」
この2人に出会ってよかった

どんな嫌なことも忘れられそう

春は出会いの季節

昔のことは洗い流そう

新しいこと始めよう

第 一 歩 初めまして（後書き）

はわわあ…

本格的に書きちゃいましたよ…

駄文で申し訳ないです m (_ _) m

見てくれた皆様、

見てくれてありがとうございます。

進化しますから許してください。

でわでわ、

これからよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1407v/>

獣と無限の絆∞

2011年10月9日11時17分発行